

擬態語の用法

——構文論の観点から——

星 野 和 子

目的と対象

日本人でも見極めが難しい擬態語を外国人が擬態語であるか否か判断するのは困難であり、その意味を推し測ることはほとんど不可能に近い。これまでの擬音語・擬態語に関する先行研究には形態と語彙に関する通時的考察、音韻と意味との相関関係の考察、意味・用法の考察、構文論的考察などがあるが、本稿は外国人に対する日本語教育への応用を念頭に置き、和語で形態が abab であるもの(ただし b が促音である語は除外する)の構文上の振る舞いを明らかにし用法を分類することを目的とする。

考察の対象としてここで取り上げる擬態語とは聴覚以外の感覚が外界から受ける刺激や感情などを音象徴的に表現した語、また、音声の模写的言語から意味・用法が転化したものを擬態語と定義した場合の語のことである。文献1で金田一春彦はこの種の語の中で無生物の状態を表わすものを正統の擬態語、生物の状態を表わすものを擬容語、人間の心の状態を表わすものを擬情語と呼ぶが、本稿は意味考察を目的としないのでそのすべてを擬態語として一括する。明らかに現実界に存在する音声の模写である言語音は擬音語と定義し主たる考察の対象から外す。

擬態語をこのように定義してもなおその中に含めるべきか否か迷うものがある。それは a b を語幹とする動詞または形容詞がある場合、a b 形態の名詞がある場合、また、その両方が認められる場合である。例えば、

「うきうき ↔ 浮く」「おずおず ↔ おじる (文語ではおづ)」「ぐずぐず ↔ ぐずる」「すべすべ ↔ 滑る」「ごつごつ ↔ ごつい」「つやつや ↔ 艶」「どろどろ ↔ 泥」「ぼろぼろ ↔ 襖」「もやもや ↔ 霧」などの語で、これらは文献1に見出し語として取り上げられている。しかし「しぶしぶ ↔ 渋る・洩い・渋」「きれぎれ ↔ 切れる」などは取り上げられていない。本稿はとりあえず文献1が見出し語として取り上げているものは考察の対象とする。

用例は下記の資料から引用する。文中での略号と出現ページ・掲載日を括弧内に示す。

1. 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』新潮社文庫み 25(銀河)
2. 阿部公房『第四期氷期』新潮文庫あ 45(氷期)
3. サンフランシスコ地震関係記事『朝日新聞』1989年10月(朝日)
4. 買物案内『暮しの手帖・III 29冬』(手帖)

1. 使用頻度・用法の概略

採集した abab 形態の擬音語・擬態語は『銀河鉄道の夜』から異なり 42 語、『第四期氷期』からも 42 語であった。また参考として『朝日新聞』のサンフランシスコ地震関係記事から 5 語、『暮しの手帖』の「買物案内」から 9 語ピックアップした。使用頻度はほとんどの語が一回であるが同一資料内で複数回使用されている語もある。四種の資料を合わせて複数回使用されている擬態語は、ちらちら (11)、ぺかぺか (7)、くるくる (6)、そろそろ (6)、ぐるぐる (5)、ばらばら (4)、ざわざわ (3)、はきはき (3)、ごたごた (3)、てかてか (3)、いらいら (2)、おずおず (2)、ぎしぎし (2)、くすくす (2)、ごつごつ (2)、ざらざら (2)、すべすべ (2)、ぜいぜい (2)、どきどき (2)、どんどん (2)、びくびく (2)、べとべと (2)、もじもじ (2)、で、23 語ある。そのうち構文上の用法が二種以上に及ぶもの 14 語の用法を次に示す。わずか 14 語ではあるが擬態語が接続するほぼすべての構文要素をカバーする。

表 1 abab 型擬態語の用法——接続——

擬 態 語	数	e 情 況 化				と情況化 ← 情況語・ 体連語 → 連体化				格要素			陳 述	
		～する	～V	～A	～N	～と V	～と A	～と なる	～に V	～の	～が	～を	e	～だ
1 いらいら	2	1				*		*					1	
▲ 2 うとうと	1	*	+			+		1						
3 おずおず	2	1	+			1								
4 もじもじ	2	1	1			+							*	
5 ざわざわ	3	1	2			*							*	
6 ぜいぜい	2	+	1	1										
7 ちらちら	11	*	0			1								
8 ごつごつ	2	1	1	*		+	+							
9 べとべと	2	1				+			1					+
10 ごたごた	3		+			1			+		1	1		
11 てかてか	3		1						2					
12 ばらばら	4		*			*			2	1				1
13 ぐるぐる	5		4			*			1					
14 くるくる	6		2		1	3								
15 そろそろ	6		3		2	1								
▲ 16 ほやほや	1					+				+				1

注 1: 数字は資料中に現われた語の使用頻度。*印は国研『現代雑誌九十種の用語用字五十音順語彙表・採集カード』マイクロフィッシュに見出された用法、+印は『擬音語・擬態語辞典』例文の用法である。

注 2: ▲2 と ▲16 は用例が一文づつであるが他にない用法があるので表に載せた。

2. 依拠する文法理論

山田孝雄・時枝誠記の説く文法説の統合発展を意図して水谷静夫が朝倉書店『文法と意味 I』に著した試案文法とその拡張案(以下、水谷文法と称す)の構文解析の規則に当てはめて擬態語の構文的振る舞いを考察・分類するが、その前に山田孝雄『日本文法論』の副詞の分類を示す。

副詞——接統副詞

——先行副詞——感応副詞

——語の副詞——

陳述副詞

——属性副詞——

程度副詞

情態副詞

山田孝雄は「と」を伴う情態副詞として「きらきら・さらさら・はらはら・ほとほと・つくつく・つぶつぶ・はたはた・ひしひし」などの擬態語も挙げ、情態副詞を次のように定義する。「この副詞は主として事物の属性観念をあらはせるものなり。即ち、事物の情態性質等をあらはせるものにして、其の観念のみをいはば形容詞に似たるものなり。かく其の意義において形容詞に似てありながら、なほ副詞なりと称せらるるは、陳述の能力を欠如せるによるなり。されば、これらは属性観念を属性そのものとしてあらはすが故に、なほ体言たること能はずして依存的に他の観念を装定するに用ゐらるるなり。〈中略〉この副詞は体言をも用言をも装定するに用ゐらる。体言を装定するには、多くは助詞「の」を伴ふ。然れども、まゝ伴はざることあり。〈中略〉用言を装定するには、亦単独に装定するものと、助詞を伴ひて装定するものとあり。〈中略〉助詞を伴へるものは頗多し。これは或は「に」或は「と」を伴へり。」

水谷試案文法はいわゆるフレーズ構造文法風に記述されたもので、用語には回帰的な定義がなされている。この文法は国文法の中核部を意味的にも自然な構造になるように説こうとするものであるが、構文規則の記述に先立ち原理的仮説が五つある。これには、時枝流に詞と辞を区別すること、語の水準・句の水準・文を区別すること、句はある条件を満たす連語を陳述辞で統べるごとに生じること、などが記されている。

格助詞は語の水準にある述語と他の要素とを結合する二項演算子にみ立てられ、格はこの結合における二要素間の順序対に関して定まる。また、格の概念を「 α と β とを組とみた格関係」「 α の β に対する格関係」「 β の α に対する格関係」の三種と規定する。三番目の定義が「述格」と名付けられるものである。

格助詞は擬態語の構文上の役割を認定する一つの目安となる。格助詞を従え $[\alpha$ 【格助詞】 $\beta]$ の形になるなら擬態語 α は副詞ではなく体連語(体言・相体言系連語)であり、同じ形式で β が擬態語であれば、それは術格に立つからやはり体連語、用連語(動詞系連語)、相連語(形容詞系連語)の可能性もある。

この文法では副詞的な修飾を司る要素を情況語と呼び、これが述格に立つ場合は転化述語と呼ぶ。ただし、陳述を拘束して入れ子を破るいわゆる陳述副詞やメタ表現的な句副詞の類は除外項目として取り扱っていない。擬態語が関係すると思われる副詞に関わる規則は次のとおりである。

情況語 → 局面連語 | 数量規定 | 程度副詞 | 情態連語

情況語は【情況化】の規則によって「ニ」「ト」あるいは零記号の「 ε_3 」を生成して修飾機能を生じる。

転化述語 → 副詞特類 | 指示副詞 | 連体詞 1 | 末カラ述素

副詞特類は述語になると零記号の述態辞 ε_1 が助動詞を従える。「せる・しめる・れる・たい」や「ようだ・そうだ」の「よう・そう」を詞と認め、前者は一種の接尾語、後者は体言として処理される。助動詞と認めるのは次のものである。

助動詞 = {ダ, アル, ナイ, デス, ゴザル, マス, ベシ, タ, ウ, ナイ, ス, マイ, ラシイ}

また、活用する語としての《形容動詞》は認めず、その語幹とされる部分を体連語の一種である相体言とする。これは【連体化】の規則で「ナ」「ノ」「タル」を生成するか、零記号 ε_3 を以って体言を修飾する。

3. 品詞認定のメルクマール

水谷試案文法の構文規則に沿って文を解析する際に、品詞認定のメルクマールとなるもの、および、紛れの可能性のあるものを次に記す。

1. 擬態語 α を程度副詞または情態副詞と考え情況語とすると、ニ・ト・ ε のいずれかで【情況化】が施される。ただし「 α ニ」のニと「 α ト」のトは格助詞の可能性もある。

2. 【情況化】による α のかかり先が語ではなく句のレベルか陳述辞である場合には、 α がメタ表現のいわゆる注釈副詞か陳述副詞である可能性も考えざるをえない。
3. α の中に体言か相体言、あるいは転化述語になるものがあるとする
と、述態辞ダ・ラシイ・εなどを従えて述態句になる。また「～ α 」で
文になっているものは α の後ろに省略を考えることもできる。
4. α に直接スル・ナサル・デキルが付いて動詞化できるなら体言の可能性
がある。
5. α がナ・ノで【連体化】するならこれも体言か相体言の可能性はある。
6. α が直接格表示を受ければ体言の可能性はある。

4. 情況語としての用法(副詞用法)

4.0. 擬態語 α には【情況化】が ε だけで行われるもの、 ε とトで行
われるもの、 ε とニで行われるもの、トだけで行なわれるもの、ニだけ
で行なわれるもの、トとニで行なわれるものがある。上に述べたように、ニ
の場合にはこれが【情況化】に働くのか格助詞かという問題があり、トの
場合にも【情況化】か格助詞かという問題が生じる。零記号で情況化し情
況語となった擬態語が修飾する構文要素には用連語系述素、形容詞系述素、
体連語系述素がある。

4.1. 零記号 ε による情況化

#1 体は、ちよつとごつごつ、骨ばっていましたが...(氷期 71)

(体は(ちよつと(ごつごつ(骨ばってい))))ましたが

体 は ちよつと ごつごつ 骨ばって い ル まし た が

擬態語 ε 用連語

情況語【情況化】述素

ε 情況語 述素

体連語【格表示】 述素

述素*陳述辞

述態句 句結合子

#2 またすすきがざわざわ鳴って～(銀河 178)

(また<すすきが(ざわざわ(鳴っ))>)て

すすき が ざわざわ 鳴ル て

擬態語 ε 動詞

情況語【情況化】述素

体連語【格表示】 述素 ε

述素 * 陳述辭

述態句 句結合子

#3 もじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。(銀河 158)

(もじもじ(立ち上っ)た)まま

#4 風邪をひいた、けちな小動物みたいに、ぜいぜい喉を鳴らすばかりだ
(氷期 232)

((ぜいぜい(喉を鳴らす))ばかり)だ

擬態語は上記のような用連語系述素だけでなく形容詞系の述素や体連語を修飾することもある。#5 の「ぜいぜい」が形容詞系述素を、#6 「くるくる」と #7 「そろそろ」が体連語系述素を修飾する例である。普通、副詞は動詞または形容詞を修飾するといわれるが、このように体連語も修飾する。

#5 ぜいぜい荒い呼吸音が、私の顔にかぶさるようにせまってきた。(氷期 63)

(ぜいぜい(荒い))呼吸音

ぜいぜい 荒い 呼吸音

擬態語 ε 形容詞

情況語【情況化】述素 ε

述素 * 陳述辭

埋込述態句【連体化】体連語

体連語

#6 そのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって～(銀河22)

1 ((くるくる(コルク抜きのよう))な)形

くるくる コルク抜きのよう な 形

擬態語 ε 相体連語

情況語【情況化】 述素 * ダ

述素 * 述態辭

埋込述態句【連体化】 体連語

体連語

これは次のようにも解析できる。その場合には「くるくる」が「コルク抜きのような形」と同格とも考えられ、#6' と #6'' の表現する事柄が同等になる。

(くるくる(コルク抜きのような形))になって

#6' そのきれいな皮も、くるくるになって～

#6'' そのきれいな皮も、コルク抜きのような形になって～

#7 私自身もそろそろ同じような年ごろだが～(氷期41)

(私自身も(そろそろ(同じような年ごろ)))だが

私自身 も そろそろ 同じような年ごろ だ

擬態語 ε 体連語

ε 情況語【情況化】 述素

体連語【格表示】 述素

述素 * 陳述辭

述態句

4.2. トによる情況化

#7 の零記号εで情況語となった「そろそろ」とは意味が異なるが、トで情況化する「そろそろ」もある。「くるくる」もεとトの両方で情況化する用例があるが、「そろそろ」のように意味が変わることはない。このほか、「おずおず」「ごたごた」にもトで情況化する例がある。

#8 年老った女の人が、どこか具合が悪いようにそろそろと出て来て～
(銀河 168)

(そろそろと(出て来))て

そろそろ と 出て来ル

擬態語

用連語

情況語【情況化】述素

述素

#9 網棚から包みをおろして、手早くくるくと解きました。(銀河 185)
(手早く(くるくと(解き)))ました

#10 頼木が、ブラウン管の青白い光の中で、おずおずと振り向いて言った。(氷期 219)

(おずおずと(振り向い))て

#11 電気器具などがごたごたと並んだ、いかにも殺風景な感じの部屋～
(氷期 152)

((電気器具などが(ごたごたと(並ん)))だ)いかにも殺風景な感じの部屋

「うとうと」は用例が一つしかなかったがトを従えて「する」に続く。「する」には本動詞としての用法の外に形式動詞としての用法もあり、例文 #12', #13, #13', #14 と比較するとき「なる」に続くトとともにこれを情況化と見るか格助詞ととるか微妙なところである。トを格助詞と見れば「うとうと」は情況語ではなく体連語である。

#12 十分か十五分、うとうととしていたような気もする。(氷期 128)

情況語としての解析((うとうとと(してい))た)ような気もする

十分か十五分 うとうと と してい た

擬態語

用連語

数量規定 情況語【情況化】述素

情況語

述素

述素 * 陳述辞

埋込述態句

体連語としての解析(((うとうと)と(してい))た)のような気もする

#12' 十分か十五分, うとうととなった。

#13 そして車の中はしいんとなりました。(銀河 203)

(車の中は((しいん)と(なり)))ました

車の中 は しいん と なル ました

擬態語 動詞

相体言 用連語

ε 体連語【格表示】述素

体連語【格表示】 述素

述素*陳述辞

述態句

#13' 車の中はしいんとしました。

#14 その瞬間, なにかすばらしい考えがちらりと浮かんだように思った。

あわてて思いだそうとしたが, もう忘れてしまっている。(氷期 8)

((あわてて(思いだそ))う)と(し))たが

また, 次の例ではトによる情況化を #6 と同じように二様に解析できる。

#15 刃の切れが悪いのか, ボリボリと, 砕けるような感じがする～(手帖 106)

(ボリボリと(砕ける))ような感じがする

(ボリボリと(砕けるような感じ))がする

以上の用例が示すようにトには情況化から転化する帰着点を表わす格助詞に至るまでの意味に流れ(連続性)があり, どこでその流れを切って情況化と格助詞とを区別するかが問題となる。

5. 体連語としての用法

5.0. 擬態語には零記号εやトで情況化して述素に続く場合のほかニを従えて述素に続く場合があり, このニを情況化とするか格助詞と取るかも問題となろう。また, 擬態語にノが続いたりノに擬態語が続いたりする

こともある。[α / β] の形で / が表われる場合は α も β も常に体言であるからその形式で現れた擬態語は体連語ということになる。α に格助詞が・ヲが続く場合は明らかに体連語としての用法である。

5.1. α =

「ぐるぐる」「てかてか」は零記号で情況化するほかにニが続く場合がある。このニをトや零記号に変えた場合の句と比べてみると、ニは情況化としての標であるよりも格助詞に近いように思われる。

#16 その葉はぐるぐるに縮れ～ (銀河 204)

体連語としての解析 その葉は((ぐるぐる)に(縮れ))

情況語としての解析 その葉は(ぐるぐるに(縮れ))

#16' その葉はぐるぐると縮れ～

その葉は(ぐるぐると(縮れ))

#17 全体がテカテカになって、ムラがなくなり～ (手帖 112)

(全体が((テカテカ)に(なっ)))て

全体 が テカテカ に なる

体言 格助詞 擬態語 格助詞 動詞

体連語【格表示】述素

体連語【格表示】述素

述素

#17' 接着剤が解けて、テカテカに光っていました。(手帖 111)

体連語としての解析 ((てかてか)に(光ってい))ました

情況語としての解析 (てかてかに(光ってい))ました

#17'' 紙の加工面が、6 種中いちばん変にテカテカ光っています。(手帖 112)

(てかてか(光ってい))ます

動詞「なる」の文型の一つは [N (div) が N (div) = V] である。例文

#17 は述素が「なる」であるからニは格助詞で転化する帰着点を表わし、

「テカテカ」は明らかに体連語である。しかし #17'' の「テカテカ」は光

り方を表わす情況語である。#17' の「テカテカ」は #17 と #17'' の中間といえよう。「テカテカに光っています」と「テカテカ光っています」には多少の意味の違いがあるだろう。その違いを作り出すのがニである。

#18 は明らかに体連語としての用法である。このようにニはトと同様に後続する動詞によって情況化の標になったり格助詞になったりするから、ニの直前要素である擬態語もまた情況語になったり状態を表わす体言になったりする。

#18 私と頼木は、さっそく棚からスクラップをおろし、ばらばらにして
～(氷期 28)

((ばらばら)に(し))て

ばらばら に す る

擬態語 格助詞 動詞

体連語【格表示】述素

述素

5.2. α / β

水谷文法ではノは連体化の標であり、擬態語が α に現われても β に現われてもそれは体言である。したがって次の「ばらばら」「ほやほや」は体言としての用法となる。

#19 水さえ雨とよばれるばらばらの粒になって～(氷期 166)

(ばらばらの(粒))になって

ばらばら の 粒 に な る

擬態語 格助詞 動詞

体連語【連体化】体連語

体連語【格表示】述素

述素

#20 コップに注ぐと、牛乳だった。「一つ、ためしてみてください。しばらくたてのほやほやです。～」(氷期 132)

(しほりたての(ほやほや))です

しほりたて の ほやほや です

擬態語

体連語【連体化】体連語

体連語

述素*陳述辞

述態句

『銀河鉄道の夜』では「ぎざぎざ」「くしゃくしゃ」「だぶだぶ」「ばさばさ」「ぼろぼろ」が #19 と同じ用法で使用されている。これらの擬態語を受けるノは、例えば、「きれいな花」「静かな町」におけるナと同じ働きをなし、後続する体言がその形態あるいは状態であることを示す。

5.3. 述語用法 $\alpha \varepsilon \cdot \alpha$ だ

擬態語に零記号の陳述辞か助動詞「だ」が続く用法である。この擬態語は述格に立つから体言・相体言・転化述語(副詞の述語用法)のいずれかである。

#21 チェックインにもかなり時間がかかり、客はイライラ。(朝日 1989-10-20)

(客)は(イライラ)

客 は イライラ

擬態語

ε 体連語

体連語【格表示】 述素 ε

述素*陳述辞

述態句

#22. ばらばらだった鎖が、急に、～、音をたててつながり合ってしまった。(氷期 140)

((ばらばら)だった)鎖

ばらばら だった 鎖

擬態語 デアッタ

体連語

述素* 陳述辞 ε

埋込述態句【連体化】体連語

体連語

5.4. 格要素としての用法 α が・ α フ

abab 型の擬態語には格要素としての用法もある。格要素になるということはその擬態語が体連語としての機能を持っているということである。以下の例はどちらも状態を表わす体言である。

#23 どうして、ごたごたがおきたりする？

((ごたごた)が(おき))たりする

#24 奥さんを外に引っぱり出してまで、ごたごたをおこす必要はないということさ～

((ごたごた)を(おこす))必要はない

6. 動詞語幹としての用法

$[\alpha$ トスル] のトが【情況化】と格助詞のどちらであるかは擬態語 α の表わす意味によって揺れ動くようであるが、 $[\alpha$ トナル | ニスル | ニナル] のトとニは格助詞と考えられる。では $[\alpha$ スル] はどうであろうか。4.2. で述べたように「する」は本動詞以外に形式動詞として機能したり他の動詞の代用とされたりするが、形態上 α はサ変動詞「勉強する」の「勉強」と同様に動詞の語幹である。しかし「勉強する」には「勉強フする」のように格助詞フが想定できるのに対し $[\alpha$ スル] には零記号化が可能な格助詞ガ・ニ・フのいずれも想定できない。とすれば α がすでに連用展叙の機能を備えていることになり、 ε による【情況化】で処理するか $[\alpha$ スル] を一語としなければならない。『岩波国語辞典第四版』によると、「する」には $[\dots(\text{ト})スル]$ の形で「その状態になる」という意味がある。

#25 私は自分が腹をたてていたから、～をみると、よけい苛々してくるのだ。(氷期 8)

(よけい(苛々し))てくる

#26 赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。(銀河 183)

(少し(おずおずし))ながら

#27 体はごつごつしていたが、気持はじつに素直な女でしたよ。(氷期 71)

((体)は(ごつごつしてい))たが

#28 汽車の中がまるでざわざわしました。(銀河 214)

((汽車の中)が(まるで(ざわざわし)))ました

#29 油汚れでベトベトしたヤカンをみがいたり～(手帖 102)

((油汚れ)で(べとべとし))たやかん

#30 ジョバンニは困って、もじもじしていましたら～(銀河 190)

(もじもじしてい)ましたら

これに対し参照した資料の範囲内では「てかてか」「ばらばら」には[α スル]の用法がなく、代わりに[α ニスル | ニナル]の用法がある(#17 #18 参照)。「べとべと」にはどちらの用法もある。[α スル]用法のαは情況語(副詞的)であり、[α ニスル]用法におけるαは状態を表わす体連語であるとするれば、「べとべと」は情況語と体連語にまたがる境界線上の語ということになる。

#31 汗でべとべとになった受話器がすべり落ちそうになった。(氷期 186)

((汗)で((べとべと)に(なっ)))た受話器

「くるくる」「ぐるぐる」「そろそろ」にはどちらの用法もない。この二つの擬態語に共通するのは人や物の動きを表わすということである。動きそのものは変化してその状態になることがないから[α トスル | ニナル]の形態をとらないのであろう。また「ほやほや」にも「その状態になる」という意味を表わす用法がない。それは「ほやほや」の状態が始発点であ

り変化の結果としてその状態に至ることがないからである(#20 参照)。

7. 結論

以上述べたことを表1に則してまとめると、ほぼ次のような結果となる。

1. ほとんどすべての abab 型擬態語には零記号またはトによって情況語となる副詞用法がある。
2. $[\alpha \text{ スル}]$ 用法のある擬態語(いらいら・うとうと・おずおず・もじもじ・ざわざわ・ぜいぜい・ちらちら・ごつごつ)にはおおむね $[\alpha = V]$ の用法がない。これは体連語としての用法がないことを意味する。この種の語は $[\alpha \text{ スル}]$ で「その状態になる」という意味を表わす。
3. 逆に $[\alpha \text{ スル}]$ 用法のないもの(てかてか・ばらばら)には $[\alpha \text{ ニナル}]$ の用法がある。この用法のある擬態語は体連語になって格要素として使用される可能性がある。
4. 2と3の境界線上の語(べとべと cf. #29, #31)には $[\alpha \text{ スル}]$ $[\alpha \text{ ニナル}]$ の両用法がある。この種の語は $[\alpha = V]$ の用法もあり、動詞 V の表わす意味によってニが格助詞である場合と情況化の標となる場合とがある。したがって擬態語自体も構文上体連語になったり情況語になったりする。
5. 生物や無生物の動きそのものを表わす語(くるくる・そろそろ)には $[\alpha \text{ スル}]$ $[\alpha \text{ ニスル}]$ の用法がない。また変化の帰着点にはなりえない語(ほやほや)にもこの用法はない。
6. 山田孝雄が述べているように情態副詞としての用法を持つ abab 型擬態語は用連語(動詞)だけでなく相連語(形容詞)や体連語(体言)も修飾する。
7. abab 型擬態語には状態を表わす体言になり、格助詞ガ・ヲを従えて主格・客格に立つものがある。

abab 型の擬態語は用法によって大きく4種に分けられる。人間の心の

状態を表わす擬情語や本来は擬音語であったものが状態を表わす擬態語として転用されているものには[α スル]用法があって[α ニナル]用法がなく、物体の動きそのものを表現する擬態語には「その状態になる」ことを表わす[α スル][α ニナル]のどちらの用法もない。事物の状態を表わす擬態語でそれが変化の結果生じる状態であれば[α ニ V | ナル]の用法があり、それが本来の状態であることを表わすものには[α スル][α ニナル]の用法がない。

「すっかり・ちょっぴり・どっさり」等 a**っ**b**り**型擬態語にはあった程度副詞が abab 型擬態語には見当たらなかった。しかし、副詞、あるいは副用語として片付けるにはあまりにも多くの用法がある。被修飾語がなくてもそれだけでまとまった意味を表現するのが擬態語であるから、体言、相体言、動詞、副詞などあらゆる品詞にわたって存在しても不思議ではない。構文上の必須要素として主格や述格に立つ擬態語があるのも当然であろう。

以上に記したことは擬態語の常識として誰でも分かっていることではあるが、このように擬態語の掛かり受け関係を構文論の立場からまとめた形で提示したものは著者自身の不勉強のせいか目にすることがない。外国人に対する日本語教育の初級段階において擬態語が整理した形で教えられることは少ない。国際交流基金『日本語初歩』は第 15 課練習で「ワンワン・ニャーニャー・モーモー・プープー・チューチュー」など動物の鳴き声を導入するが、中級段階へ進んだとき必要となるのは擬音語から擬態語へと用法が転化して構文上の必須要素となったものであろう。そのような擬態語の典型的なものを典型的な形で初級段階で導入するのも一つの方法ではないかと思う。

参考文献

1. 浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
2. 水谷静夫・石綿敏雄他(1983)『朝食日本語新講座 文法と意味 I』朝倉書店

3. 水谷静夫(1990) 東京女子大学日本文学科文法研究会配布資料
4. 丸山直子(1990) 格助詞と格と結合価『計量国語学』17巻4号
5. 鈴木雅子(1984) 擬声語・擬音語・擬態語『研究資料日本文法 ④』明治書院
6. 渡辺実編(1983) 『副用語の研究』明治書院
7. 松下大三郎(1977) 『増補校訂標準日本口語法』勉誠社
8. 山田孝雄(1908) 『日本文法論』宝文館
9. 鈴木忍・川瀬生郎(1985) 『日本語初歩』国際交流基金